

ひこうき少年◇辻原僚

にんげんのひとりひとりがお守りのひとつでしょうね　ほら海の家

転んだときにサンキューって言って走っていった少年はまだ階段にいた

うっかりと吹けた口笛うっかりと海から何か受け取るような

モーツァルトとしか言えない演奏に窓から増えていくこどもたち

感じ取りつづけることだ鈍感な朝を、煽てるような光を

砂にスプライトこぼすと泡だけが残って　ねえスプライトって知ってる？

あいさつとハイビスカスを与えようとおおきな犬の絵を描くひとへ

なんかぜんぶキャンセルしたくなる くもはまるまるまるくならなくもない

首筋のかゆみをたどるてのひらの潜水艦のようなしずけさ

パラソルをたたむ男はパラソルをあけた男に会えないでいる

ゆうやけの尻のあたりにくつろいでいるのだろうか一番星は

少年のごはんのうたを聞いたかい指差すものはもうなくなつた

死ぬなんて嘘はさみしい夏の夜にしなびたものは焼きそばになる

ただ船にならぶだけでも微笑んでまだいるか座を忘れてしまう

ひこうきと話せるという少年の寝ているうちに独りでに失せろ

胸といふ甕◇加賀塔子

葉を枝をめぐれる水のゆたかさよ地に直ぐ立てる君の名の樹よ

どんな子とほほゑみ問へば赦されたやうに語り出す　まだ泣かない

きみがうたふ君がわれではないことよ靴の底ひに雨の浸みゆく

人妻を恋ふ歌などを教へたる駅までの道ひとりて歩む

暴力をふるへぬ人が握りきし幾度も人を打ちたるわが手

手をとればなにかを言へばかわつたか　沈黙といふ誠実もある

汝がうちに抱くもつともうつくしき記憶のそばの樹となり生きたし

傘の柄のつめたさ君はもうわれの手にさはらない 歩道を渡る

舞台といふ泉にひとり降り立てば定まりゆくわがうちなる幹よ

張りつめた水面みなものひかり象なき水を湛へる胸といふ甕

水面をなづるがごとく白鍵に指おき想ふひとを恋ふ汝を

雨の日が嫌ひなおまへだから雨が似合ふわたしだから それでも

春の詩の名と言はれしを捨て生きる荒野に遠き一本の塔

くるしみも春のひかりへみな還るあなたをすきになつてよかつた

大海へ 梶は再びはなさない舟はひとりで漕げるのだから

特等席の傍観者◇大村咲希

廊下には桃の匂いが満ちている君の実家でヤクルトを飲む

君のココナッツミルクがミルクだったこと二人で言っ
て信じてもらおう

君のママだけの私の呼び方がある 歩道橋渡つてくるね

この町で違う言葉を話しだす君の妹に優しくされる

目をとじるように夢から覚めていく夢 炭酸が鼻に抜ける

思い出のどのお祭りもこの夏になりそう つめたいくちびるのうら

悲しくてしかたないときなめようとしていた飴をお祝いにした

君そして君の恋人を前にしたソファ一席、はくちよう座のデネブ

友達という語の意味は広いつて信じ頷く角度変えない

もう君の冬は高三の冬じゃない りんごジュースが苦くてあげる

銃と克蘭ベリーあなたを撃ち抜いた恋人の夢のなかできらやか

美容師に二人の星の話する間に髪はまつすぐになる

テーブルに頬をつければ積んであるマンガの匂い ここで読み切る

夏は魔物 君の子供もアサガオの鉢を抱えて歩くだろうな

綴りだす君の名前を題にした物語これは私の話

鉛の港◇関 寧花

前髪のなびきを反射で見てしまい冥王星には飽きた気がした

母を悲しませた記憶語るときあなたが呼んだあなたの名前

斬新なお祈りとして耳元でささやく難しいスープのレシピ

あげられるものが花丸しなくてあなたの好きな曲が苦しい

違う窓を開けているとは気づかずに涼しいねえと言いつつ合う晩夏

再生ボタンの位置を教える指先がつめたくてつめたくて待てない

すぐに泣く私のことは「やっかい」と梅雨入りの朝のように許した

未来とは一本道だあなたまでちよこれいと歩いていける

終電が通ったあとの鉄橋に悲しい記憶も引っかかっている

夏のたび光の中で何度でもあなたにかりそめの羽根を見たい

抱きしめない。自分にばかり敏感な涙も見えてる深夜高速

力づくでピザカッターを転がした。許したいのに返事もしない。

訣別でなく回り道だと言ひ張って老いていくのも知るかと笑う

轟音の中で思い出すたびに「え？」と聞き返す時の笑顔だ

ひとつずつ港をたどれば逢えるって信じて最果てで鳥になる

職質を受けたおかげか今日もまだ命は尽きてなかったようだ

闇鍋にお前の指をぶちこんで やめた からし醤油が合うはずだから

「おでんはなにが好きってきかれてメのうどんって答えられるようじゃなきゃ人生いきって楽しかねえべ？」

ポエジーに毒され続けているせいでデリヘル呼ぶことさえも愛しく

「風俗の待合室だとウォーリーを三人くらいは見つけられるし」

他人事みたいに自慰を繰り返し不在通知は更新される

いんもうが手にからまってとれないの 朝に三人啜る蜂蜜

昨日、剃刀変えた、でしょ。ついてるよ。口に。赤くて白いの。ほら。

消しゴムに刻んだやつらの名は消えてやがてゆっくり写る性病

採血を繰り返すから俺っぽいやつになりなよ来世は明るい

献血のたびに失う血液と俺を一緒に覚えていてくれ

「消えていく人の悲しみとかそれもダイソーなんかで買えるんですか」

財布から出てくるものはレシートとどこかにあったネジっぽいもの

ポエジーとやたらと言ってる人たちも殴れば傷つく 人は人でしょ

この線路をまっすぐ行けば君のいた町に着くけど所詮それだけ

愛を惜しみなく◇榛葉純

地下駅の階段のぼり今日もまた死へと一日近づく愉悦

細密の粹を極めた花活けを嫌わないよう夢は捨てたよ

あなたからもらった参考書を無駄にしてみましたも許しておくれ

愛憎のハイブリットに苛まれながら破れた毛布を被る

にんじんを箸でつまんで「じゃがいも」と口から洩れる　これが疲れだ

混乱のあまり感情ないままに受け入れていた予期しないキス

この世では夭折したもん勝ちですな　唐紅のナプキン捨てる

お砂糖はいらんゆーのに付いてきてテレビの横にどンドン貯まる

今日の殺意をもっておだんごに止まった虫をぶっ叩きます

こと問えばひどくあなたは泣くだろう 望遠鏡をひも解いていく

あかねさすシュプレヒコール受けながら語る言葉を持たぬ大木

徒歩圏の漫画喫茶に鳴り響く人間賛歌は勇気の賛歌ッ！

朝マックだけが味方の未来でも僕は笑っていられるだろう

お父さん、走り抜けたよ。産湯から白いうさぎの跳ねる海まで

惜しみない愛をあなたにあの人に全人類に振りまいていけ

生きるに値する◇堂那灼風

それなりの場所で命を与えられ死にたい場所をこれから探す

空の果て光の果てへ散る羽よ俺たちの手の触れえぬものよ

打ち鳴らせ鉄の多脚の雑音へ最期の最期の抵抗として

銃口の黒は平等 傷口の赤も平等 アット・ジ・エンド

足音の吸われて消える潔癖な回廊の先すべてが陰る

それぞれの大事なものを持ち寄ってすべての色を塗り込めた黒

グローブの内に切り傷深々と誰にもわからない右拳

いつまでも手の届かない空があり舗道は硬く冷たく続く

若者はダメにされたたと若者でなくなった頃こぼすだろうさ

終われない、なあそうだろう動かない脚を引きずり奪い返そう

思い出は色鮮やかに遠ざかり少年時代の続きを生きる

墓石に高いワインをかけてやる十五で死んだ歳下の兄

この先を信じてほしいポジティブな根拠の不足しがちな明日を

花が咲き鳥がさえずり人がいる俺が闘うここが戦場

眠れれば夜明けが来るし目覚めればそこは朝だしほら生きている

バスで行く◇堂那灼風

(魂は二十グラムと仮定する) 手荷物一人八キロ以内

当てのない長旅になる俺たちは人間だから少しずつ減る

旅立ちのともは小さくまとめよう弾倉だって空っぽでいい

荷造りをしていたやつは手遅れで命の糧は旅路に探す

風呂敷に包めるだけの財産を担ぎひとりここで飛び乗れ

近頃は万引きなんて言わなくてみんなどこかで贖っている

人間の華やかなりし頃を知る鉄骨の塔が故国の墓標

子供らにアンパンなんか持ってきて魔法使いは日に日に痩せる

来い元気待つ行く電話書き付けた郵便局の壁に人混み

魂の重さを信じない君の祈りの声は低く重たく

六トンのゾウと百年生きたカメそれから君を秤に乗せる

赤い血が愛を忘れたことはなく血が赤いのは多分そのせい

エーテルの光を確かに見たと思う体はそこに置いて行きなよ

散り散りになった大地を我々の轍で全部縫い合わせよう

窮まれば拳で打って火を入れて次の町までまたバスは行く

私生活◇山崎有理

梅と桜の花が咲くの見比べる季節のためにきのうを増やす

あしびきのアイドルにさすラブソングおもちゃで育っていたことさえも

思い出のあふれたダムで隣人の墓石を墓石にぶつけてやろう

だれだってかまわず生きていてほしい防波堤からマッチを散いて

人肌のような冬だろ首筋をつかむ両手がようやく動く

カーテンがいつせいに閉まる夜になったおれはやらないがみな鳩を出せ

こわがりな暗殺者たち堤防のむこうむこうの打ち上げ花火

骨なしのフライドチキン 恐竜を語る子どもがわすれないこと

明日は仕事がないのだけれどLINEには疲れている夜この私生活

たぶんこのスマホの機能の半分もあなたのことを知らないけれど

バスソルト 古いものはちよつとしたらもつと古くなってもうずぶ濡れだ

だれもタバコを吸わないと言うのでおれだけが持っていたライターでたのしむ花火

休んだらもつと大人になるのだろうカレンダーのように痩せてしまつて

カーテンを夜しめるのは向こうへと電気のひかりを漏らさぬために

地震にも慣れてしまつて可笑しいとわらうのだからおかしいよ、で？

拝啓、波際より◇渋谷美穂

いつの日かあなたがどこかへ帰るまで抱^{いだ}いていようこの感情で

曇天が北を隠してさまよえばカチューシャの唄をくちずさむ君

夕暮れが終わらぬうちに山裾のアウトラインをなぞって帰る

カフェオレの女神に抱かれ溶けてゆく真白の泡にみな口付ける

ジャンパイの遊び方さえ知らずしてミニカーの如く机を滑らす

ピーナツを暴力として掴んでは投げつける君道の半ばに

くつきりとあなたがつけた足跡に雨がたまってわたしが映る

海鳥が冬の波濤を越えて来て真綿を散らすこの砂浜へ

みつともないみつともないと砂まみれの靴を叩いて裸足で歩く

ひしと立つ君の背筋の凜々しさを教えもせずに見送るこの場で

港からモールズ信号送り合うすでに声知るわたし達でも

ひとつひとつ船が灯した星々は集まり届く陸地の誰かへ

灯台のものが暗いと呟けば花火を灯そう凍えた手でも

エアポート飛び去るあなたを見届ける やがてあかつきすべてを飲み込む

あたたかさ告げゆく風の波際へわたしは裸足となりてかけゆく